地震、雷、火事、親父

稲宮　健一

世の中で怖いものは「地震、雷、火事、親父」と言ったものだ。確かに地震は怖い。最近では阪神・淡路、東日本、直近では能登半島など、壊滅的な揺れが突然襲い、大きな破壊をもたらす。雷も平原などで遭遇すると直撃を受ける可能性があるが、避雷器で避けられることもある。火事も就眠中な、一酸化酸素中毒で逃げられないこともある。保険である程度補償される。これに比べ、親父は怖くなくなった。

さて、怖い順に自然現象、最後に人が入っているが、一番怖いのは親父でなく、「人」だ。人の怖さが最近著しくなってきた。ロシアによるウクライナ侵攻であろう。トランプ政権になって、一日で終わらせると豪語したが、ずるずると続き、プーチンの野望を誰も止められない。プーチンはかつての鉄のカーテン内の国々に触手を伸ばそうとしている。プーチンは統治の方法が間違っていたので鉄のカーテンを破られたと思っているようだ。国際共産主義の失敗の根本原因に目をつぶり、自国並びに圧制を引く国々と共に言論統制、事実隠蔽により、無理が通れば道理が引っ込む現実である。

もう一方の大国が従来と不連続な激変状態にある。かつて、鉄鋼でも、自動車産業でも、多くの労働者が汗をかき、米国の産業を支えた時代があった。しかし、時代は高度な情報産業に移りつつある。我々に身近でも、毎日マイクロソフト、インテル、アイホン、アマゾンなど、煙を出さない企業が世界を席巻している。五月三日付の日経によると、確かに経常赤字は大きいが、同時にそれに相当する資本流入もあるのだと、貿易赤字が害悪か否かは議論のあるところと論じている。時代を引き戻し、煙を出す工場の復活は解決策にならない。

ＩＴ、ＡＩなど知識階級に富が偏重する社会になっている。得た知識の元は前時代までに構築された基礎が親になっている。成果を得られた今は、その富を社会に還元すべきであり、富が循環する革新的な仕組みの出現を期待する。

（二〇二五・五・八）